

【研究ノート】高齢者施設における看護職のストレスに関する 研究の動向

魚 住 郁 子

金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程後期課程

A review of recent literature on stresses among nurses in long-term care health facilities

Ikuko Uozumi

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

The purpose of the present study was to elucidate future issues related to research on stress experienced by nurses working in long-term care health facilities, based on a review of Japanese literature. The results of our review of literature concerning stress in nurses who work in long-term care health facilities revealed that previous literature can be classified as being characterized by one of the following five viewpoints: 1) factors of stress, 2) physical and psychological response to stress, 3) stress coping, 4) development and utility of scales to objectively measure stress, and 5) other. Of these, research concerning factors of stress in long-term care health facilities were characterized by “systemic problems of long-term care health facilities,” “difficulty in communicating with elderly persons and symptoms such as verbal and physical abuse,” “difficulty of inter professional coordination,” etc. Moreover, it was found that issues facing research on stress in nurses working in long-term care health facilities are 1) insufficient number of studies concerning countermeasures for stress in nurses, 2) lack of research concerning comprehensive relationships among various factors, 3) lack of examination of stress from a positive viewpoint. These findings reveal the necessity of future research that examines educational support related to countermeasures for stress, comprehensive relationships among various factors, and stress from a positive viewpoint.

要 約

本研究の目的は、高齢者施設で働く看護師が体験するストレスについての国内研究のレビューから、今後の研究課題を明確にすることである。高齢者施設で働く看護師のストレスに関する研究は、1) ストレスの要因に関する研究、2) ストレスによる身体・精神的反応に関する研究、3) ストレスへの対処に関する研究、4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究、5) その他の5つの観点から分類できることが分かった。なかでも、ストレスの要因に関する研究では、少数の看護師の配置や、業務量の多さに代表される「高齢者施設の体制的な問題」、「高齢者との意思疎通困難、暴言・暴力などの症状」、「多職種連携への困難さ」などの高齢者施設におけるストレスの特徴を見出すことができた。

さらに、高齢者施設の看護師のストレス研究の課題として①看護師のストレスへの対策に関する研究が不十分なこと、②多様なストレス変数の関係を包括的に検討する研究が欠落していること、③ストレスをポジティブな側面から捉える検討がなされていないことの3点が明らかになった。今後、ストレス対策に関連した教育支援、多様な要因間の包括的な関係性やストレスをポジティブな側面から捉える研究が必要であると考える。

キーワード：Nurse看護師， long-term care health facilities看護師高齢者施設， Stressストレス

I. 問題と目的

医療施設で働く看護師を対象としたストレス研究は、レビュー論文等を含め、数多くなされている。研究の成果として、ストレスの要因を業務内容に関連するものと、人間関係関連のものがあること、さらに属性によりその認知が異なること等が指摘されている(柴ら, 2011)。またストレスが、バーンアウトや離職意図に繋がることが明らかにされ(木村ら, 2010; 山田ら, 2006), その対策として、ストレスマネジメントに関する研修会の必要性についても触れるなど(前田ら, 2008; 渡邊, 2008), 既に多くの知見が得られている。それに比べて、高齢者施設で働く看護師のストレスに関する研究は、件数が少ないうえ、ストレスの特性についても言及されておらず、文献検討もなされていない現状にある。

高齢者施設の入所者の現状を表す「平成25年介護サービス施設・事業所調査の概況、介護保険施設の利用者の状況調査」(厚生労働省, 2014)によると、介護保険施設に入所している高齢者は、要介護度の重度化や認知症の増加などの特徴を有していることが明らかになっている。そのため看護師には、生活者として高齢者を看ることと、障害や疾患を持つ療養者を看ることの両側面からの介入が必要であり、さらに、安らかな死に資することができるような多岐にわたるケアが求められている。施設の看護師はそれらに対応すべく、多くのストレスに曝されていることが予測される。また、そうした状況が離職意図に繋がる可能性があると言える。

介護保険施設における看護師の離職率は、介護老人福祉施設で21.5%、介護老人保健施設で16.4%(日本看護協会, 2016)となっており、微減傾向を示す医療施設の看護師の離職率11.0%(日本看護協会, 2016)を上回っている。その要因に医療施設の看護師とは異なるストレスが蓄積されているのではないかと考えた。

本研究の目的は、高齢者施設の看護師が経験するストレスに関する国内の論文を概観し、高齢者施設の看護師のストレス特性を抽出するとともに、研究動向及び今後の課題を明らかにすることである。

II. 方法

国内のWEBエンジン(医学中央雑誌)を使用し、「介護保険施設」「看護師」「ストレス」をキーワードとし、学術文献に絞り検索し、①研究デザイン、②内容、③対象、④目的、⑤結果の観点から分類した(表1)。

III. 用語の定義

1. 高齢者施設

介護保険法で定められている施設サービスには介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)、介護老人保健施設(老人保健施設)、介護療養型施設の3施設がある。本研究では、医療施設である介護療養型施設を除いた介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)、介護老人保健施設(老人保健施設)の2つの施設を高齢者施設とし、レビューの対象とした。

IV. 結果

医学中央雑誌WEBで「介護保険施設」「ストレス」「看護師」をキーワードとする検索をしたところ、29件検出された。そのうち、看護師を対象とした学術論文に絞ると13件となった。また老年看護学の専門学会誌である日本看護福祉学会誌に掲載された論文から、主題に「介護保険施設」「ストレス」「看護師」の全てが含まれている松岡ら(2010)や田畑ら(2016)2件の論文を選出し、計15件の論文をレビューの対象とした。

1. 文献数の推移

15件の論文について出版年の推移を図1に示した。介護保険制度制定前は1件も出版されておらず、2002年以降、数は少ないものの毎年1件から3件の論文が提示された。

2. 研究デザイン

表1に示したように、研究デザインによる分類は、質的研究5件、量的研究9件、レビュー論文1件であった。なお文献番号は年代順に整理した。

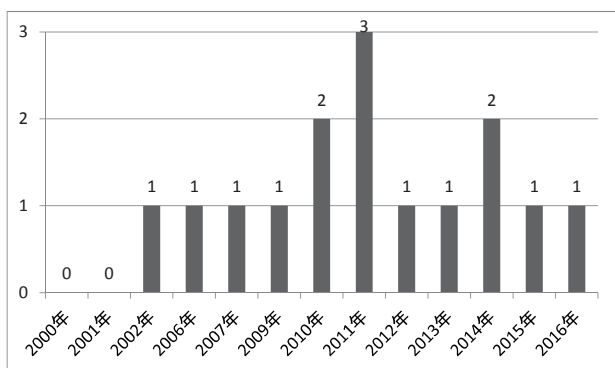


図1 医学中央雑誌からの学術論文の検索結果の推移

3. 文献の内容

文献の内容に関しては、柴ら（2011）の看護師のストレスマネジメントに関する文献検討の分類を参考に、対象となる文献の研究内容を1) ストレスの要因に関する研究, 2) ストレスによる身体・精神的反応に関する研究, 3) ストレスへの対処に関する研究, 4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究, 5) その他に大別した。その一覧を表2に示した。

表2 対象文献の内容に関する一覧

ストレスの内容による分類	質的研究 文献番号	量的研究 文献番号	レビュー 文献番号	件数
1) ストレスの要因に関する研究	1, 5, 7, 11, 14			計5件
2) ストレスによる身体的・精神的反応に関する研究		2, 3, 8, 10		計4件
3) ストレスへの対処に関する研究		4, 6, 9		計3件
4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究		12, 15		計2件
5) その他			13	計1件

1) ストレスの要因に関する研究

看護師のストレスの要因に関する5つの論文から、ストレスの要因を分類整理するために、記述の事柄の意味を読み取り、コード化し、さらに共通性に基づいてカテゴリー化したところ (1) 高齢者施設の体制的な問題に関するストレス, (2) 高齢者とその家族に関するストレス, (3) 多職種, 他者との連携に関するストレスに分けることができた (表3)。

(1) 高齢者施設の体制的な問題に関するストレス

体制的な問題の中で、大半の論文が看護師の人数の少なさ、業務量の多さ、報酬の低さをストレスの

要因として挙げていた (松岡ら, 2010: 小口ら, 2011: 阿出川ら, 2014: 瀧上ら, 2015)。さらに、松岡ら (2010) は少ない人数で、十分なケアができない状態であることを「高齢者を尊重したケアの実施を阻む労働条件」と表現した。また、高齢者施設の看護師が医療者としての判断を委ねられていることに対し、看護師が不安や重圧を感じていたことを記述していた (松岡, 2010: 小口ら, 2011: 阿出川ら, 2014)。

(2) 高齢者とその家族に関するストレス

長谷川 (2002) は、高齢者の看護をするうえで「意思疎通困難、暴言暴力などの症状への対応が困難である」と記述し、さらに小口ら (2011) は、「家族との関係性を良好に保つことが難しい」と述べていた。

(3) 多職種、他者との連携に関するストレス

小口ら (2011) は「職員の定着が難しく業務がマニュアル通りにされず混乱が多い」と記述し、阿出川ら (2014) は、他の職種との意見の違いやコミュニケーション不足から生じるストレスを「他職種との人間関係を構築することが難しい」と表現していた。

表3 ストレスの要因に関する内容と詳細

カテゴリー	コード
高齢者施設の体制的な問題に関するストレス	高齢者を尊重したケアの実施を阻む労働条件
	勤務条件
	給与の低さ
	看護師の人数配置が少ない
	業務量が多い
	医療判断をしなければならないことへの不安
	看護師としての責務から生じる精神的重圧
	自己の判断力への不安
	急変時の対応がストレス
	施設ケアにおける質の向上の限界
高齢者とその家族に関するストレス	制度への意見・疑問
	意思疎通困難、暴言・暴力などの症状への対応が難しい
	二次障害の恐れ
	他の入所者への影響があると困る
	入浴などのケアの拒否が多い
多職種、他者との連携に関するストレス	利用者や家族との関係を保つことが難しい
	個々の家族に対応することは難しい
	他職種との人間関係を保つことが難しい
	ケアがマニュアル通りされず、混乱する
	自分以外の職員との人間関係を構築することが難しい

2) ストレスによる身体・精神的反応に関する研究

ストレスによる身体・精神的反応についての記述は4件あった。山口(2006)らは、老人保健施設職員を対象とし、ストレスに関する調査を実施した結果、70%の職員が日常的に全身および局所の疲労感を訴えていたことを明らかにした。また、箱石ら(2008)や多田ら(2012)は、交代勤務、夜勤勤務等により、ストレスや疲労感が高いことを記述していた。加えて、杉山ら(2011)は、看護師、介護士の不安、重責感がユニット型ケアの開始3か月後に高値を示したことを明らかにした。

3) ストレスへの対処に関する研究

ストレスへの対処についての記述は3件あった。Haraら(2010)は、ユニット型介護老人保健施設における看護職員の認知症患者へのケア実践に対して制御と逃避という対処をとる傾向があることを明らかにした。Hyodou(2009)は、看護師、介護士ともに上司によるサポートがストレスの軽減要因であることを指摘した。また、佐賀里ら(2011)は、介護保険施設職員と医療・保健施設職員の2郡に分け、特定の自己効力感の差の調査を実施した結果、介護保険施設の職員のほうが有意に高値を示していたことを指摘していたが、ストレスとの関係性についての記述は見当たらなかった。

4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究

15論文中の2件が、尺度の開発に関するものであった。横矢ら(2013)は、31項目からなるストレス尺度を因子分析し、「急変時の判断と対処」「入所者や家族への対応」「他施設との連携」「施設の危機管理」「業務の煩雑さ」「入所者からの暴言・暴力」「スタッフ間の人間関係」「仕事・家事・育児の両立」「治療方針の不確かさ」の9因子を抽出した。また、田畑ら(2016)は老人保健施設の看護師、介護士を対象に「物理的環境」「役割葛藤」「役割曖昧さ」「グループ内対人葛藤」「人々への責任」「技能の低活用」等を含む13因子41項目から成る尺度を作成した。いずれも下位尺度の信頼性は高く、妥当性については、既存の尺度との間で有意な相関関係が示されたことから、有用なツールであることが確認できた。

5) その他

岡本ら(2014)は、介護老人保健施設における急変時対応の看護師の実態を12件の文献から、「ケアの実際」「教育・研修ニーズ」「ストレス・困難」「業務自己評価」の4つ概念を抽出した。

急変時の適切な判断を迫られることに緊張感を感じながら看護業務を行っていることに精神的負担感を感じていた。

V. 考察

高齢者施設の看護師のストレスに関するレビューから、1) ストレスの要因に関する研究、2) ストレスによる身体・精神的反応に関する研究、3) ストレスへの対処に関する研究、4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究、5) その他の5つの観点から分類できることが分かった。さらに、本研究を通して、高齢者施設の看護師のストレスに関する課題が見出された。具体的には、①看護師のストレスへの対策に関する研究が不十分なこと、②多様なストレス変数の関係を包括的に検討する研究が欠落していること、③ストレスをポジティブな側面から捉える検討がなされていないことの3点である。以下にこの3点について考察する。

1. 看護師のストレスへの対策に関する研究が不十分なこと

医療施設の看護師を対象として、ストレスマネジメントに関する教育支援が、ストレス対策に効果があることが明らかになっている(前田ら, 2008; 渡邊, 2008)。しかし、当該研究においてはHaraら(2010)の看護職員のストレス対処に制御と逃避の傾向があるとした記述にとどまっており、ストレスの対策に関する記述は見当たらなかった。その理由として介護保険制度が始まり10年を迎えたばかりであり、高齢者施設の看護師を対象とした研究の蓄積が少ないことがあると推察できる。

また、高齢者施設特有のストレスの要因として、松岡ら(2010)、阿出川ら(2014)が記述した「高齢者施設の体制的な問題」や長谷川ら(2002)が指

摘した「意思疎通困難、暴言・暴力などの症状」への困難さや、「多職種連携の困難さ」（阿出川ら、2014：小口ら、2011）などの3点を見出すことができた。

高齢者施設の体制的な問題に関して、高橋（2009）は、一人の看護師にかかる業務量の多さや報酬と業務量の不均衡を指摘しており、本研究の松岡ら（2010）、阿出川ら（2014）、小口ら（2011）の指摘と一致している。しかし、これらの多くの論文が看護師の業務量の多さや給与の低さを記述しているにも関わらず、十分な策が講じられていない。その理由として介護保険が医療保険の受け皿として誕生し、介護保険報酬が医療報酬より低いことが挙げられる。今後、制度を含めた、抜本的な改善が必要であると考える。

高齢者の暴言・暴力へのケアに関して長畑ら（2003）は、方法がわからないまま手探りで対応し、その結果、無気力を抱くことを指摘している。さらに、松田ら（2006）は、高齢者施設の看護師の傾向として、高齢者からの暴言・暴力に対して、看護師がネガティブな感情を有することを良くないことと捉えていること、それがストレスになっていることを指摘している。すなわち、高齢者からの暴言暴力を受けた際に看護師自身に生じた高齢者に対するネガティブな感情に向き合うための教育支援が必要であり、その過程で、高齢者の暴言・暴力へのケアを検討する必要があると考える。

多職種連携の困難さの要因として、平野ら（2015）は、生活の場における看護職と介護職の役割分担や役割の曖昧さを指摘している。村田（2011）は、多職種連携の実践には、複数の立場を調整しながら、必要なことを見極めて対応を変容させていく複雑なスキルが必要であると述べている。平野らや村田らが指摘するように、役割が曖昧なかで複雑なスキルを身につけることは容易なことではない。しかし、むしろ多職種連携を介護保険施設の看護職に培われる必要不可欠な看護師の能力、強みと捉えるべきではないかと考える。よって、そのための教育体制を整える必要があるといえる。

2. 多様なストレス変数の関係を包括的に検討する研究が欠落していること

当該研究では、バーンアウトや職務満足などの多様な変数間の包括的な関係性についての検討がなされていなかった。

医療施設の看護師を対象として、ストレスの関連要因、緩衝要因を含んだ研究がなされていた。具体的には、職務満足が得られないとストレスが高まること、ストレスの対処がうまくいかなければ、バーンアウトや離職に繋がる可能性がある（新見ら、2006：塚本ら、2007）こと、さらに、上司のサポートや、自己効力感を高める支援がストレスを軽減させることなどを立証していた（塚本ら、2009：平井ら、2005：吉田ら、2011）。一方、当該研究においては、横矢ら（2013）がストレスの尺度を作成時に職務満足とストレスとの間に弱い相関関係があることを記述していたが、ストレスの緩衝要因である自己効力感やバーンアウトとの関係性に言及した論文は見当たらなかった。今後、多様な要因間の包括的な関係性についての検討が必要であると考えられる。

3. ストレスをポジティブな側面から捉える検討がなされていないこと

当該研究では、自己の成長に寄与する可能性についての記述は見当たらなかった。大西（2006）は、ターミナルケアに携わる臨床看護師のストレスフルな体験は否定的な側面ばかりではないと述べている。またAntonovsky（1979）によれば、ストレッサーの影響は、健康的な結果をもたらす要因にも十分成り得ると記述している。このような視点から、既にターミナル期の患者のケアを担う看護師を対象とし、ストレス関連成長（Stress related growth）に関する研究が行われていた。逆井ら（2009）はストレス関連成長に「援助規範意識」「患者ケアの満足度の高さ」が関与していることを明らかにし、また西田ら（2011）は、「対処行動」「理想の看取りの確立」が看護師の成長に影響を与えることを明らかにした。これらの先行研究が言及するように高齢者施設の看護師も生活を支えるケアの中でストレスを抱えながらも、多くのことを学び、自己成長の機会を得ている可能性がある。さらに高齢者施設においてス

ストレスのポジティブな側面への検討は、就労継続や、看護師の職業アイデンティティの獲得などの一助となる可能性が予測される。これらのことから、高齢者施設の看護師を対象としたストレスのポジティブな側面に注目した研究が必要であると考ええる。

VI. 結論

高齢者施設のストレスに関するレビューの結果から1) ストレスの要因に関する研究, 2) ストレスによる身体・精神的反応に関する研究, 3) ストレスへの対処に関する研究, 4) ストレスを客観的に測定できる尺度の開発とその有用性に関する研究, 5) その他の5つの観点から分類できることが分かった。

なかでも、ストレスの要因に関する研究では、「高齢者施設の体制的な問題」、「高齢者との意思疎通困難、暴言・暴力などの症状」、「多職種連携の困難さ」などの高齢者施設におけるストレス研究の特性を見出すことができた。

さらに、高齢者施設の看護師のストレス研究の課題として①看護師のストレスへの対策に関する研究が不十分なこと、②多様なストレス変数の関係を包括的に検討する研究が欠落していること、③ストレスをポジティブな側面から捉える検討がなされていないことの3点である。今後、ストレス対策に関連した教育支援、多様なストレス変数の関係性を包括的に検討やストレスをポジティブな側面から捉える研究が必要であると考ええる。

謝辞

本論文の作成にあたり建設的なご指導を賜りました金城学院大学大学院人間生活学研究科宗方比佐子教授に心から感謝いたします。

文献

阿出川奈美, 淡下玲子, 金子真弓他 (2014): 介護老人保健施設で働く看護師が抱えるストレス, 日本看護学会論文集. 老年看護 44, 19-22
Antonovsky. A (1979): A. Health, stress, and coping: New perspective on Mental and physical well-being. Jossey-Bass Publishers .San Francisco: America.

(山崎喜比古・吉井清子訳, 2008:健康の謎を解くーストレス対処と健康保持のメカニズムー, 3-18, 有信堂高文社, 東京)
箱石文恵, 井上寛隆, 小峰伸一他 (2007): 老人施設に勤務する看護および介護職員の身体的, 心理的ストレス, 埼玉医科大学短期大学紀要18, 61-65.
長谷川真澄 (2002): せん妄状態にある老人保健施設入所高齢者のケアにおける困難ー看護婦・士へのアンケートの調査から, 札幌医科大学保健医療学部紀要, 5号, 57-63.
Hara Sachiko & Mikane Sakae & Futouy Yoshiko (2010): Relationships between Dementia Care Duties and the Job Satisfaction of Nursing Staff in Unit-type Geriatric Health Service Facilities), Kawasaki Journal of Medical Welfare, 15 (2), 61-75.
Hyodou Hiroyuk(2009): A Study of the Work Conditions, Dally Living Habits and Occupational Stress of Nurses and Care Workers Employed by Nursing Care Medical Facilities), Journal of Rural Medicine,4(1), 7-14.
平井麻紀, 平井啓 (2005): 看護師におけるストレス対処のセルフ・エフィカシー尺度の開発と信頼性・妥当性の検証, 生老病死の行動科学, 10, 15-21.
平野聖, 竹田恵子, 大田晋他 (2015): 医療福祉における多職種連携のあり方に関する研究, 川崎医療福祉学会誌, 24 (2), 209-220.
木村良美, 八代利香 (2010): 看護師のバーンアウトに関連する要因, 日本職業・災害医学会会誌, 58 (3), 120-126.
厚生労働省 (2014): 平成25年介護サービス施設・事業所調査の概況, 16-18.
小口多美子, 豊嶋三枝子, 須佐公子 (2011): 定年退職後に高齢者施設に勤務している看護職者のストレスや困難・雇い主への要望, 獨協医科大学看護学部紀要, 5 (1), 49-54.
松田千登勢, 長畑 多代, 上野 昌江他 (2006): 認知症高齢者をケアする看護師の感情, 大阪府立大学看護学部紀要, 12 (1), 85-90.
松岡広子, 百瀬由美子, 渡辺みどり他 (2010): 介護保険施設に勤務する看護職が体験する役割ストレス, 日本看護福祉学, 15 (2), 149-162.
村田真弓 (2011): 医療福祉専門職の多職種連携・協働に関する基礎的研究ー各専門職団体の倫理綱領にみる連携・協働の記述からー, 大妻女子大学紀要, 13, 159-165.
前田和子, 三木明子, 富永知美他 (2008): 看護職のストレスマネジメント研修の効果, 日本看護学論文集精神看護学, 39, 98-100.
長畑多代, 松田千登勢, 小野幸子 (2003): 介護老人保健施設で働く看護師の痴呆症状に対するとらえ方と対応, 老年看護学, 18 (1), 39-49.
西田三十一, 自岐康子, 習田明裕 (2011): 患者の死を体験した看護師の成長に関連する要因の検討, 本看護学会誌, 31 (4), 3-13.
新見寿子, 西村裕子, 栗飯原朋子 (2006): 急病棟における看護師のストレスコーピングの分析, 日本看護学会論文集看護総合37号, 342-344.

- 日本看護協会 (2016) : 特別養護老人ホーム・介護老人保健施設における看護職員実態調査報告, 78.
- 日本看護協会 (2016) : 2015年病院看護実態調査, 公益社団法人日本看護協会 広報部, 1. 大西奈保子 (2006) : ターミナルケアに携わる看護師の態度と悲嘆・癒しとの関連, 東洋英和大学紀要, 2, 89-100.
- 岡本華枝, 藤野文代 (2014) : 介護保険施設における看護師の急変時の対応に関する文献検討, ヒューマンケア研究会誌, 5 (2), 67-71.
- 逆井麻利, 松田英子 (2009) : 終末期医療に携わる臨床看護職者のストレスとストレス関連成長 (Stress-Related Growth) に関する研究, 健康心理学研究, 22 (2), 40-51.
- 柴麻由子, 吉川洋子 (2011) : 看護師のストレスマネジメントに関する文献検討, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 5, 259-278.
- 佐賀里昭, 田中浩二, 平瀬達哉他 (2011) : 介護保険施設職員の自己効力感の特徴-医療・保健施設職員との比較から一, 日本作業療法研究学会誌, 41 (1), 23-27.
- 杉山匡, 児玉桂子 (2011) : 従来型施設のユニット化改修に伴う特養職員のストレス反応の変化—改修前と改修3か月後の比較, 日本社会事業大学研究紀要, 57, 99-109.
- 田畑真澄, 山崎喜比古 (2016) : 介護老人保健施設で働く看護職と介護職のストレスサー及びストレス特性の比較, 日本看護福祉学会21 (2), 221-235.
- 多田由紀, 松本晴美, 吉崎貴大他 (2012) : 介護老人保健施設における女性交代制勤務者の食事摂取量と体重増加の関連, 日本循環器予防学会, 47 (1), 23-27.
- 高橋優子 (2009) : 介護保険施設における看護師の実態と定着への課題—介護老人福祉施設と介護老人保健施設の看護職員の比較結果, 社会教育研究, 27, 31-46.
- 瀧上恵子, 森元文代, 坂口始津代他 (2015) : 介護老人保健施設における新人看護師の職場適応の特徴 急性期病院における新人看護師との比較, 日本看護学会論文集, 看護教育, 45, 278-281.
- 塚本尚子, 野村明美 (2007) : 組織風土が看護師のストレスサー, バーンアウト, 離職意図に与える影響の分析, 日本看護研究学会雑誌30 (2), 55-64.
- 塚本尚子, 結城瑛子, 船木由香他 (2009) : 職場風土としての看護師長のあり方が看護スタッフのバーンアウトに及ぼす影響, 日本看護研究学会, 32 (5), 105-112.
- 渡邊尚子 (2008) : 精神看護師に対するストレスマネジメントプログラムの効果, お茶の水医学雑誌56 (1), 27-34.
- 山田裕紀子, 岸太一 (2006) : 看護師の離職意思に関わる要因について, 日本心理学会, 70, 179.
- 山口隆司, 加納良男, 小池伸一他 (2006) : 介護老人保健施設職員のストレスに関する調査, 作業療法ジャーナル, 40 (1), 915-1354.
- 横矢ゆかり, 百瀬由美子, 藤野あゆみ他 (2013) : 介護老人福祉施設における看護職のストレスサーと職務満足度の関係, 日本看護福祉学会, 18 (2), p.15-27.
- 吉田えり, 山田和子, 森岡郁晴 (2011) : 卒後2~5年目の看護師における自己効力感とストレス反応との関連 日本看護研究学会誌, 34 (4), 65-72.

表1 対象文献の概要

文献番号	著者	論文名など	研究デザイン	内容	対象	目的	研究結果
1	長谷川真澄(2002)	せん妄状態にある老人保健施設入所高齢者のケアにおける困難—看護婦・士へのアンケートの調査から、札幌医科大学保健医療学部紀要、5号、57-63.	質的研究	要因	老人保健施設看護師	老人保健施設の看護婦・士を対象にせん妄状態の入所高齢者をケアする際の看護婦・士の困難性について検討する。	老人保健施設の看護婦・士が困難感の有無に影響していた。さらに、困難な内容とし「意思疎通困難、暴言暴行などの症状」「他人入所者への影響」「二次障害の恐れ」「勤務体制の問題」「対応にストレスを感じる」などが抽出された。
2	山口隆司・加納良典・小池伸一他(2006)	介護老人保健施設職員の介護ストレスに関する調査、作業療法ジャーナル、40(1)、83-90.	量的研究	反応	老人保健施設看護師、介護士	老人保健施設職員の介護ストレスサ—および個人的要因、ストレス反応、コーピング、QOLの状態を明らかにする。	看護婦を含む31名の対象者の70%がストレス反応として日常的に全身疲労感を呈しており、頭痛、眼精疲労などの局所疲労感とともに仕事の影響を受けていた。なかでも35.4%がうつ傾向を示し、情緒的消耗が危険領域に及んだ者は25.6%に達していた。さらに、45.1%の職員が充実感を感じにくい状況にあった。
3	箱石文恵・井上麗隆・原嶋朝子他(2007)	老人施設に勤務する看護および介護職員の身体的、心理的ストレス、埼玉医科大学短期大学紀要、18(1)、61-65.	量的研究	反応	特別養護老人ホーム、老人保健施設看護職員、介護職員	老人施設に勤務する看護および介護職員のストレスの緩和と対応について検討するために勤務前後のストレス負担状況と身体的、心理的側面から調査し、身体的ストレス、心理的ストレスとの関係性を明らかにする。	看護婦32名、介護職員74名からの回答を得た。ストレス総合得点の平均値は看護職員より介護職員が高値を示したが、有意な差は見られなかった。尿中バイオリン(酸化ストレスマーカー)の濃度は同職種とも、夜勤後が高値を示した。
4	Hiroyak Hyoudou(2009)	介護施設で雇用されている看護師と介護士の労働条件、生活習慣及び仕事上のストレスに関する研究(A Study of the Work Conditions, Daily Living Habits and Occupational Stress of Nurses and Care Workers Employed by Nursing Care Medical Facilities), Journal of Rural Medicine, 4(1)、7-14.	量的研究	対処	老人保健施設看護師、介護士	介護施設の看護師と介護士の労働条件、日常生活習慣と職業的なストレスを明らかにする。	看護婦27名、介護士41名に調査研究をした結果、看護師が介護職より職場環境にストレス、仕事への適応感において有意に高かった。ストレスによる身体・精神反応については有意な差はなかった。同職種とも上司によるサポートがストレスの軽減要因と考えられた。
5	松岡広子・百瀬由美子・渡辺みどり他(2010)	介護保険施設に勤務する看護師が体験する役割ストレス、日本看護福祉学会、15(2)、149-162.	質的研究	要因	特別養護老人ホーム、老人保健施設看護職員	介護保険施設で働く看護師が役割や看護業務の状況に対するストレスを明らかにする。	役割に関するストレスとして「高齢者を尊重したケアの実施を阻む労働条件」「看護師としての責務から生じる精神的重圧」「施設ケアにおける質向上の限界」の3つのカテゴリーが抽出された。できた。
6	Shohko Hara Sakaie Mikane Yoshiko Futouy(2010)	ユニット型介護老人保健施設における看護職員の認知症患者への困難感と職務、職務満足との関係(Relationships between Dementia Care Duties and the Job Satisfaction of Nursing Staff in Unit-type Geriatric Health Service Facilities), Kawasaki Journal of Medical Welfare, 15(2)、61-75.	量的研究	対処	老人保健施設看護師	介護老人福祉施設で働く看護婦324名の仕事満足度と認知症ケアへの困難感との関連を明らかにする。	制御と逃避という2つの要因が仕事の実施に影響していたことが分かった。今後、看護師が職務満足度を維持し質の高い認知症ケアを実施していくために、看護師の制御を中心とする反応をすることを理解する必要がある。
7	小口多美子・豊島美枝子・須佐公子(2011)	定年退職後に高齢者施設に勤務している看護職員のストレスや困難、雇用者への要望、雇用者への要望、獨協医科大学看護学部紀要、5(1)、49-54.	質的研究	要因	特別養護老人ホーム、老人保健施設・看護師	老健の看護職員の就業時のストレスや困難、雇用者への要望を明らかにする。	ストレスを「勤務条件」「職員との人間関係」「制度への不満」「報酬の検討」等に大別した。
8	杉山匡・見玉桂子(2011)	従来型施設のエユニティ化改修に伴う特養職員のストレス反応の変化—改修前と改修3か月後の比較、日本社会事業大学研究紀要、57、99-109.	量的研究	反応	特別養護老人ホーム(3名の看護職員を含む26名)の看護職員	特別養護老人ホームでのエユニティ化改修導入が施設で働く職員(3名の看護職員を含む26名)のストレス反応にどのような影響を与えているかを検討する。	不安・重責感の下位尺度で3か月後が有意に高値を示した。また、改修後3か月時に身体症状に関する得点が有意に高かった。それらに対し適切な対応を迅速に行う必要性がある。
9	佐賀里昭・田中清二・平瀬達哉他(2011)	介護保険施設職員の自己効力感の時変・医療・保健施設職員との比較から、日本作業療法研究学会誌、41(1)、23-27.	量的研究	対処	特別養護老人ホーム、老人保健施設全職員	介護保険施設職員の自己効力感の実態を調査し、介護保険施設における特徴的な自己効力感を注出する。	主観的な健康感に介護保険職員群、医療・保健施設職員群で有意な差は認められなかった。特定の自己効力感においては友人に関する4項目で介護保険施設の職員が有意に高値を示した。
10	多田由紀・松本唯美・田中清二・吉崎貴大他(2012)	介護老人保健施設における女性交代制勤務者の食事摂取量と体重増加の関連、日本循環器予防学会、47(1)、23-27.	量的研究	反応	老人保健施設看護師、介護士	介護老人保健施設における女性看護婦、介護福祉士を対象とした食事摂取量と勤務形態、体重増加の関連について明らかにする。	交代制勤務者は日勤務のみ者と比較して既婚者が少なく、ストレス、疲労感が高かったが、20歳時からの体重増加については有意な差は見られなかった。交代勤務者における体重増加は、夜勤中の夜食によるエネルギー摂取や睡眠状況が有意に関連していた。
11	阿山川奈美・淡下玲子・金子真弓他(2014)	介護老人保健施設で働く看護師が抱えるストレス、日本看護学会論文集・老年看護44、19-22.	質的研究	要因	老人保健施設・看護師	介護老人保健施設で働く看護婦のストレスを把握する。	看護婦が抱くストレスとして「老健の体制的な問題」「自己の判断力への不安」「他職種との人間関係」の3つの要因が抽出された。
12	樺矢ゆかり・百瀬由美子・藤野あゆみ他(2013)	介護老人福祉施設における看護職員のストレスサ—と職務満足度の関係、日本看護福祉学会18(2)、15-27.	量的研究	尺度	特別養護老人ホーム・看護師	ストレッチャ—尺度の開発とストレッチャ—と職務満足度の関係を明らかにする。	ストレス尺度として①急変時の判断と対応②入所者や家族への対応③他施設との連携④施設の危機管理⑤業務の煩雑さ⑥入所者からの暴言・暴力⑦スタッフ間の人間関係⑧仕事量・育児の両立⑨治療方針の不確かさの9因子31項目からなる尺度を作成した。看護婦、看護師のストレスと職務満足度の間に弱い相関関係がみられた。
13	岡本華枝・藤野文代(2014)	介護保険施設における看護婦の急変時の対応に関する文献検討、ヒューマンケア研究学会誌、5(2)、67-71.	文献レビュー	その他	介護老人保健施設・看護師	介護老人保健施設における急変時対応の看護婦の実態を明らかにする。	急変時の対応に関する12の文献から、「ケアの実際」「教育・研修ニーズ」「ストレス・困難」「業務自己評価」の4つに大別することができた。
14	瀬上恵子・森元文代(2015)	介護老人保健施設における新人看護婦の職場適応の特徴—急性期病院における新人看護師との比較、日本看護学会論文集、看護教育、45、278-281.	質的研究	要因	老人保健施設・看護師	介護老人保健施設の新人看護婦の不安、困難を把握する。	介護老人保健施設で働く看護婦は、対象の多さに不安や戸惑いを感じていた。さらに多職種連携の重要性を挙げていた。
15	山崎直澄・山崎喜比古(2016)	介護老人保健施設で働く看護職員のストレスサ—及びストレス特性の比較、日本看護福祉学会21(2)、221-235.	量的研究	尺度	老人保健施設・看護師、介護士	介護職と看護職の職場ストレスサ—及びストレス特性を明らかにする。	NISHOをもとに13因子からなる尺度を作成した。そのうち「物理的環境」「役割意識、役割の曖昧さ」「グループ内対人葛藤」「グループ間対人葛藤」「人々への責任」「技能の活用」の7項目で看護職が介護職より有意に高かった。